

入選

テーマ1：医療と福祉、わたしの体験
「幸せ」

東京都・駒澤大学高等学校2年 星野希晏

「宝物を探す“人生”という名の航海に出る。」これは私の心に残る、父の最期の言葉です。このメッセージがスマホに届いたとき、当時私は中学生。父の手術の直前のことでした。

最初の入院は私が小学生のとき。父が癌だと知らされたときは、正直あまり実感がわかなかつたけど、驚きと胸のざわめきで涙が出ました。退院後の父は入院前と変わらず元気で、何度か父のバイクの後ろに乗ってドライブに行きました。東京から父の実家のある新潟まで、約八時間かけて行ったこともありました。しかし、私がそんな日常に安心しきっていたときも癌は父の身体を着々と蝕んでいたのかもしれない。私が中学二年生のとき、再発が発覚しました。初めて病院へ面会に行った日、細いチューブに繋がれて服の上からでも分かるほどやせてしまった姿を見て、父の目を見るのができなくなりました。目を合わせたら、きつと溢れないように飲み込んだ涙を抑えることができなくなってしまうから。また、そんな私を見て父がどんな顔をするか、当時の私には耐えられませんでした。

数カ月後、私たちは父の担当医から余命宣告を受けていました。その際に看護師の一人が、父が入院中よく家族のことを話していたことを伝えてくれました。辛い抗癌剤治療をここまで長く続けてくれたのは、きつと家族のおかげだろう、と。私は悲しみや誇らしさと同時に、悔しい気持ちでいっぱいになりました。どうしてもと父の側に行つて手を握ったり話をしたりしてこなかつたんだらう。もつと父が頑張っているときに一緒にいればよかった。自分の事ばかりで何もできなかった自分が本当に嫌になりました。

私は今でも父の最期を鮮明に憶えています。慌ててかけつけたとき

の部屋に充滿するあの独特な医療薬品の匂い、心電図モニターから鳴り響くアラームの音、そして目を見開いたまま痙攣している父の姿を。少しづつでも確実に弱っていくのを感じていたから父を見送る覚悟はできているつもりだったけど、いざその状況になると嗚咽で言葉も出てきませんでした。その日の夜、父は逝ってしまいました。

父が亡くなってからは意外にも涙は出てこなくなりました。私は父の葬式でさえ泣きませんでした。でも最近になって、ふとした瞬間に父のことを想うと、とめどなく涙が溢れ出ることがあるのです。どれだけ泣いても、怒っても、もう父に会うことは叶わないと分かってはじめて、今までの“普通”がどれほど幸せだったのか痛感しました。父の十八番料理を家族で囲んで「おいしい、おいしい」と言っている日常、たまにバイクに乗って二人で出かける日常、なんなら家にこもつて一緒にダラダラする日常。何も特別なことはなくても、ただ側にいて笑っていられる日常こそが幸せだったんだな、と。だから私は、同級生が「お父さんウザい」と口にするのを聴くと、そんなことでも羨ましくなってしまう。もし父が健康に生きていたら、今頃私もみんなのように「父離れ」していたのでしょうか。

“普通”がたまたまなく羨ましい。
私は今、どうしようもなく父に抱きしめられたいのです。